聖　書：使徒 20：1〜12
説教題：ひとかたならず慰められ
日　時：2014 年 6 月 15 日

パウロはエペソ伝道を終えてマケドニヤへ向かって出発します。19 章 21 節：「パウロは御霊の示しにより、マケドニヤとアカヤを通ったあとでエルサレムに行くことにした。」　この旅には二つの目的がありました。一つは先に伝道した町々のフォローアップです。マケドニヤはピリピ、テサロニケ、ベレヤなどの町々、またアカヤはギリシャのアテネ、コリントなどの町々です。まずマケドニヤへとパウロは渡って行きます。そこで「多くの勧めをして兄弟たちを励ました」と 2 節にあります。もちろんこの励ましは御言葉の宣教をもってということでしょう。そしてギリシャへやって来ます。使徒の働きには記されていませんが、パウロの手紙から分かることは、パウロはコリント教会のために本当に心を砕いたということです。すでに彼はこの教会に 3 つの手紙を書き送っていました。この教会には分派の問題、また不道徳の問題がありましたが、パウロはエペソからまずそのことを叱責する手紙を書きました。しかしそれはコリント人たちに受け止めてもらず、パウロとコリント教会の関係は険悪なものになったようです。そこでパウロは二つ目の手紙、コリント人への手紙第一を書き送ります。しかしそれも功を奏しません。そこでパウロは思い切って短くコリントを訪問したようです。しかし願っていた成果は得られず、かえって失望しながらエペソに戻って来ました。そして「悲しみの手紙」とか「涙の手紙」と呼ばれる三つ目の手紙を書いて、テトスに渡し、コリント教会へ送り出していました。

果たしてその手紙はどのように受け入れられたのか。そのことを思いながら今回マケドニヤまで来た時に、テトスが帰って来て素晴らしい知らせをもたらしてくれました。そこでパウロはマケドニヤから 4 つ目の手紙、すなわちコリント人への手紙第二を書きます。パウロがこの知らせに接してどんなに喜んだかは、たとえばⅡコリント 7 章 5〜7 節や 13〜16 節に記されています。そのコリントへの町へ入って、パウロは 3 ヵ月間過ごしました。おそらく旅ができない冬の時期でもあったのでしょう。

この旅のもう一つの目的は、エルサレム教会への献金を集めることでした。ユダヤのキリスト者たちは迫害や飢饉のために、その日の生活にも事欠くようになっていました。その困窮した彼らを助けるための愛の献金を集めて回ったのです。彼はこうしてユダヤ人の教会と異邦人の教会の一致に心を砕きました。4 節に記されている同行者のリストは、異邦人教会からの代表使節たちです。最初のベレヤ人ソパテロ、テサロニケ人アリスタルコとセクンドはマケドニヤの諸教会代表。次のデルベ人ガイオと、出身地は書かれていませんがルステラ出身のテモテはガラテヤ諸教会の代表。アジヤ人テキコとトロピモはエペソを中心とするアジヤ州の教会代表。そしてパウロはアカヤ地方の代表も兼ねていたのでしょう。これはいかに当時の異邦人諸教会が一致してエルサレムを助けるわざに仕えていたかを美しく示しています。

さて、そうしてトロアスに来た時のことが続いて記されます。トロアスはかつてヨーロッパへの伝道が導かれた記念すべき町です。5 節には久しぶりに「私たちは」という表現が出て来て、

この使徒の働きの著者のルカが一行に加わったことが暗示されています。まず注目したいのは7節の「週の初めの日に」という言葉です。この言葉は4つの福音書のいずれもがイエス様の復活の出来事を記す際に使った言葉です。ですからこの言葉一つで、ここを読む人はイエス様が復活した日曜日のことを思い起こします。そしてこの7節から分かることは、この週の初めの日にクリスチャンたちの礼拝は行なわれていたということです。パウロはこのトロアスに来て7日間滞在したのですから、選ぼうと思えば他の日でも選べました。しかしこの週の初めの日、イエス・キリストの復活の日を選んで、当時のキリスト者たちは集まって御言葉を聞き、またパン裂きすなわち聖餐式をしていたことが分かるのです。パウロはこの日、夜中まで人々と語り続けました。当時はまだ日曜日は休みの日ではありませんでした。ですから人々はその日の働きを終えてから、夜に集まって来たのでしょう。そして特にパウロは翌日出発することにしていたため、人々と語り合うのが夜中にまで至ることになったのでしょう。

そんな状況で、青年ユテコの転落事件が生じます。説教中の居眠りを記している有名な箇所です。なぜこの記事がこうして聖書に載せられているのでしょうか。説教中に寝ないように！という警告のためでしょうか。またある人は逆に、これは長く説教しないようにと示唆するものだと言います。9節に「パウロの話が長く続くので」とあります。またこのエピソードはある意味で説教者にとっては慰めでもあります。なぜならあのパウロの説教でも居眠りする人がいたと知るからです。それならこんな私の説教では一人や二人、五人や十人居眠りをしてもあまり気にしないことにしよう、と自分を慰めることができる。他にも色んなことが言えそうですが、果たしてルカは何を言いたいのでしょうか。

このユテコという人は「青年」だったと言われています。注解書によると、これは8〜14歳の少年を指す言葉のようです。なぜ彼は窓のところに腰かけていたのでしょうか。他に座る場所がないほどこの場所は一杯だったからでしょうか。そして8節に「ともしびがたくさんともしてあった」とあります。夜ですからあかりがたくさん付けられていたのですが、これによって部屋は益々酸欠状態になっていたのでしょう。ボーッとなりやすい環境が整っていたのです。もしかするとそんな中、新鮮な空気を吸って眠気を覚ますために、ユテコは窓のところに座ったのかもしれません。彼も一日働いて来たのでしょう。そしてパウロの話が長く続くにつれて、睡魔との厳しい戦いに陥ったのです。9節の表現は彼が必死に戦ったことを暗示します。しかしとうとう眠り込んでしまった。そして気持ち良くなって頭がクラクラ〜ッといった時に、彼は3階から落ちてしまったのです。人々が急いで駆け降ると、彼はもう死んでいた。医者ルカがそう書いているのですから、確かにそうだったのでしょう。そこへパウロが降りて来て彼の上に身をかがめます。かつてのエリヤ、またエリシャを彷彿とさせる姿です。そして言います。「心配することはない。まだいのちがあります。」これは死んでいなかったということではなく、奇跡的な力がここで働いて、再びユテコに命が戻ったということでしょう。

人々はこの後、どうしたでしょうか。驚くべきことに、彼らはまた上がって行って、パンを裂いて食べてから、明け方まで長く話し合ったとあります。これはもちろんユテコはそっちのけで、ただ御言葉に熱中したということではないと思います。彼らが話し合っている福音とユテコの今の出来事は別々のことではありません。彼らは罪のために死の状態にある者たちをい

のちに生かしてくださるイエス・キリストの福音を聞いています。彼らはその主の生ける臨在を肌で感じながら、一層御言葉を学ぶことへ導かれていたのでしょう。しかも明け方まで、すなわち徹夜するほどの熱心さをもって、御言葉を飢え渇いて求めたのです。

ユテコはこの間、どうしていたのでしょうか。12 節は 11 節と並行して、人々が語り合っている間にユテコは家に連れて行かれたということなのか。あるいはユテコはまだ意識が十分回復していない状態で休んでいて、後から家に連れて行かれのか、よく分かりません。いずれにしろ、人々はこのことを通して「ひとかたならず慰められた」と今日の箇所は結ばれています。もちろんユテコが生き返ったので人々は慰められたのです。しかし人々が味わった慰めは、単にそれだけのことではなかったと思います。むしろこの出来事を通して、自分たちの生も死も偉大な恵みの内に包んで導いてくださるイエス・キリストを見上げたのです。その方に愛され、守られている自分たちであることを味わったからこそ、彼らはただならぬ慰めに深く満たされたのではなかったでしょうか。

今朝、私たちが心に留めたいのは、神は私たちにも同じく「ひとかたならず慰められる」という祝福を備えてくださっているということです。今日の箇所には「慰め」という言葉が繰り返し出て来ています。1 節の「励ます」、2 節の「励ます」という言葉は、12 節と同じく「慰める」とも訳される言葉です。つまりパウロが 1 節 2 節で人々に語った福音そのものに「励まし」「慰め」があるのです。一体それはどういう「励まし」「慰め」でしょうか。それは一言で言って、どんな罪人にもキリストにあって救いが差し出されているという慰めでしょう。私たちのこの世での悩みや困難は、詰まるところ、私たちの罪に由来しています。もちろんある人の苦しみはその人自身の罪の結果であるという風に単純なものではないことは聖書の様々な箇所に示されています。しかし私たちのこの世の苦しみ悲しみの根底に罪の問題が横たわっているというのはその通りです。しかしイエス・キリストはその私たちを救うためのすべての代価を、十字架に至る生涯を通して完全に支払ってくださいました。それゆえ、この方を信ずる者は、その罪を拭っていただくことができる。罪の力と呪いから解放される。いつその完全な救いが最終的に実現するかは神に委ねなければなりませんが、神が定めた最も良い時に、それらから完全に解放され、必ず永遠の御国に生きる者となるという約束が与えられている。この福音を知る時、私たちは大いに慰められるのです。今ここでどんなことがあっても、私の将来は確実に明るいということだけは言える。途中経過がどうであろうと最後は必ず栄光へ至る。そしてそれまでに起こることで無駄なことは一つもなく、すべてが私の益につながる形で導かれる。この福音を受け止めるなら、誰にでも非常な「励まし」「慰め」が与えられるのです。

まさにその慰めの福音がユテコの出来事に例示されています。居眠りをしたということでユテコを責めることは可能です。窓のところに座るのは不注意だと批判することもできます。しかしそんな彼をキリストが生かして下った。ここに私たちの罪や弱さを拭ってくださるキリスト、死で終わりとせずいのちに生かしてくださるキリスト、私たちの最大の敵である死にさえも勝利の力を持っていてくださるキリストを知ります。このお方を知るところに、ひとかたならず慰められることの秘訣があるのです。

私たちもこのような大きな慰めまた励ましに生きたいと思うでしょうか。それならキリスト

にこそ目を上げなければなりません。世の中の他のものに、ではありません。このキリストにおいて、またその方を指し示す御言葉において、神は今日もこの祝福を私たちに差し出してくださっています。そしてこの週の初めの日の礼拝は、特別な意味でこの祝福にあずかるための時と言えるでしょう。この週の初めの日はイエス・キリストが私たちのための勝利を勝ち取って下った日です。この日こそ、共に集まって御言葉に聞き、聖餐にあずかるようにと主は定めています。そのことを感謝して、私たちはこの日にしっかりと主を仰いで、主にある慰めに生かされるように自らを整えるべきです。週の初めの日にユテコを生かした主が、同じこの週の初めの日にここにも臨在くださっています。その主を真に仰ぎ、礼拝するなら、私たちはどんな悩みに直面していても励ましを受けることができるのです。ひとかたならず慰められるという祝福に生かされることができるのです。そこからキリストを益々喜び、賛美し、やがての御国に目を上げて、キリストをあかししつつ進む主の民の生活へ遣わされて行きたいと思います。